

老舗のチカラ⁽⁵⁴⁾

タイヨーパッケージ

立山町利田



アイデア創造の場

白を基調にしたモダンな本社オフィス。社員がさまざまな目的で活用する—立山町利田

会社メモ 1941(昭和16)年、富山市太田口通りで楠信治商店を個人創業。48年に太陽紙器工業として法人化し、67年に現社名に変更した。2010年から立山町利田に本社を置く。医薬品をはじめ食品や菓子の包材製造を手掛け、16年9月期の売上高は約45億円。従業員240人。3代目の楠行博社長は県印刷工業組合理事長。



医薬品メーカーの信頼を得た。配
置薬からOTC(医局薬店向け)、
その後はジェネリック(後発)を
はじめとする医療用医薬品向けに

—高品質は当たり前。その上で
顧客ニーズをどれだけ先取りでき
るか?—楠社長はこれからも進
取の精神で、紙器業界に新風を吹
き込んでいく考えだ。
(経済部次長・高松剛)
隔週土曜に掲載します

進取の精神 紙器に新風

(第3種郵便物認可)

白を基調にしたモダンな空間に、たくさんのはじてテープルが並ぶ営業や開発設計など全ての部署を集約した本社工場のオフィス。この空間が同社の徹底した合理主義と進取の社風を象徴する。使い勝手の良いテーブルは打ち合わせやランチスペースに早変わり。時間やフロアの有効活用を実現する。部署を隔てる仕切りはなく、社員に自然と情報の共有を促す。

「高品質を上回る『超品質』の製品を生み出すにはみんながアイデアを出し、一緒に課題解決を目指すことが大切。このオフィスがそれ可能にしてくれる」と楠行博社長(67)は話す。

「超品質の製品」とは、売り上げの7割を占める医薬品向けパッケージのことだ。創業から75年の歩みの中で医薬品関連分野に本格参入してまだ20年。成長の原動力となつた事業を手掛けるまでに

■ ■ ■ ■ ■
は、さまざまな模索があった。

創業は1941年。紙風船やノートなど配置業者が得意先に贈る土産物を扱う「進物屋」としてスタートした。九谷焼の置物や輪島塗の漆器なども幅広く扱ったが、戦時下の物資不足に伴い、厚紙で置き漆の保管箱を組み立てる紙器メーカーへと転換した。

戦後は紙パッケージの品ぞろえを多様化させる試みに乗り出した。57年に業界初の「デザイン室」を設置。ふたを開けると中のお菓子やマッチが飛び出すカラクリ箱

やますすしなどに使われる特殊形状の容器を次々に考案した。玩具メーカーと組んでカルタやバブルといった製品を手掛けたのもこのころだ。

ヒット商品を生みだし注目を集めたものの、業績には直結しなかった。特殊形状の製品を量産できず、設備や技術を持たず、ほとんどが外注頼みだったからだ。「企画やデザインばかりが先行している。利益を出せる体质ではなかつた」と楠社長は振り返る。

■ ■ ■ ■ ■
生き残りをかけて方針転換したのは80年代半ば。的を絞ったのは医薬品業界だった。医薬品の箱は医薬品業界だった。医薬品の箱は本社工場を完成させた。最新鋭の設備を導入し、医薬品メーカーの形がシンプルなため既存設備で量産が可能。年間を通して安定した受注も見込める。一方で、求められる品質水準が高く、多くの同業者が挑戦していた。後

90年代半ば、他社に先駆けてカメラを搭載した自動検品装置を導入。不良を出さない体制を整え、質管理の徹底だった。生産設備の充実に伴い、DNAとも言える企画・デザイン力が生まれる品質水準が高く、多くの同業者が挑戦していた。後

も領域を広げた。
そして2010年。医薬品包材に特化した生産拠点として現在の本社工場を完成させた。最新鋭の設備を導入し、医薬品メーカーの工場の包装工程と同水準のクリーニング環境を整備した。

「ロンドレスパッケージ」は切札と外箱を一体化した高機能の医薬品包装材で、緩衝材を別に用意する必要がない。医薬品メーカーのコスト低減に貢献する画期的な商品だ。

—高品質は当たり前。その上で顧客ニーズをどれだけ先取りできるか?—楠社長はこれからも進取の精神で、紙器業界に新風を吹き込んでいく考えだ。